# インドシナ難民の宗教的諸相に関する一考察
## ―2 つの定住促進センターの事例を通じて―
## Analyzing the Religious Aspects concerning Indochinese Refugees
## ：A Case Study of Two Resettlement Promotion Centers

高橋　泉　Izumi Takahashi
大谷大学真宗総合研究所
Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute

キーワード：インドシナ難民、宗教、姫路定住促進センター、大和定住促進センター

１．はじめに

ベトナム戦争の終結後、日本国内には 2 つの大規模難民支援施設「姫路定住促進センター」（以下「姫路センター」と略記）および「大和定住促進センター」（以下「大和センター」と略記）が設置された。両センターの設置に当たっては、カトリック教会が土地提供などの貢献を果たしたことは有名である（寺本，2001、遠藤，1990 など）。他方、ベトナム・ラオス・カンボジア三国の民族からなるインドシナ難民（厳密には難民条約上の難民ではない）の母国での主要宗教は、仏教を中心としてカトリック信仰なども近年その教勢を伸ばしており（今井，1994）、インドシナ難民の宗教的アイデンティティは多様である。

２．先行研究との差異

姫路センターについては、その運営の中心的存在であったカトリック神父への調査が久保・瀬戸徐・乾（2014）によって行われ、同神父の語りにみる当時の姫路センターの運営の実態と、カトリック教会の貢献の様相が明らかにされている。他方、定住インドシナ難民の宗教的実践については川上（2001）、高橋（2018）、戸田（2001）などによって、ベトナム難民を中心としたカトリック教会及び仏教系宗教組織の活動実態などが実証的に解明されてきた。また大和センターについては、地域の宗教組織による支援活動が浦崎（2002）、高橋（2024）などによって明らかにされるとともに、在日カンボジア系住民やラオス系住民が集う宗教施設に着目しその意義を検討した研究などが蓄積されている（岩佐，2011、村田，2013 など）。一方、両センターにおける大規模難民支援の比較を行いながら、インドシナ難民をめぐる宗教的諸相を明らかにした研究は、相対的に多くない。そこで本研究では、改めて両センターの支援に着目しその比較を行うとともに、定住インドシナ難民をめぐる宗教的諸相の解明を目的とする。なお本研究は、倫理審査を経て、関連文献及び関係者への調査を中心的方法として採用した。

３．調査結果

まず、両センターの敷地については上記の通りカトリック教会の協力を得て確保された。ただ姫路センターは教会の敷地内に設立されたのに対し、大和センターはカトリック教会の所有地ではあるものの、住宅街に設置された。次に、難民事業本部の職員以外の支援の担い手については、姫路センターは主にカトリック教会の神父やシスターが担ったのに対し、大和センターでは地域住民によるボランティアが中心となり、運営上不可欠であった難民の子どもの託児など多様な支援活動を展開した。さらに姫路センターの入所難民の国籍はベトナム 2201 名・ラオス 439 名でカンボジアは 0 名であったのに対し、大和センターはカンボジアが 1217 名で最多であり、受け入れ状況の違いがある（その他ラオス 857 名・ベトナム 567 名）。そして姫路センター周辺地域では、カトリック信仰を有するベトナム難民の宗教的支援の受け皿としてカトリック教会が機能し、国内各地のカトリック教会は定住難民の礼拝先となった。他方、大和センター周辺地域では、ラオス・カンボジア系難民を中心として、定住難民が集う場としての宗教文化施設の設立が希求されていたが、その用地確保のほか既存施設の改修費用など、資金面における調整が難航した。また難民の死に際し、地元の仏教寺院による墓地埋葬支援が行われたが、当該寺院は日常的な難民の宗教的実践の場としての機能を有するものではなかった。

４．考察

以上のような両センターの支援は、難民の信仰宗教間における宗教実践の困難性の差異を示している。カトリ

ックの信者に関していえば、姫路センターの難民支援が世界的な宗教組織形態を有するカトリック教会によって行われたことにより、その諸資源を活用した宗教活動が可能となったことが考えられる。実際にカトリック教会に集っていたベトナム難民は「教会はベトナムのような温かい感じで…外国人にとっての教会の助けは本当に必要です…。」との記録を残している（カトリック難民定住員会，1994）。

他方で、大和センター周辺地域にはいわゆるエスニック・コミュニティとしての機能を有する宗教的実践の場は見られず、同センターを退所した定住難民は、その宗教的実践の場として独自に宗教施設を立ち上げていく必要があったことが考えられる。もちろん、カトリック信仰を有するベトナム難民などは、地域のカトリック教会での宗教的実践を試みたことが考えられるが、特に大和センターの特徴として、母国の主要宗教を上座仏教とするラオス・カンボジア系難民が多かったこともあり、仏教寺院としての宗教的実践の場を新たに創設する必要があったといえよう。以上の事例から、両センターの難民は、その信仰の対象に応じて宗教的実践の場を求め、既存の宗教組織への所属あるいは新たな宗教施設の建設という形で諸活動を継続したことが示唆される。そこには、定住後のエスニック・コミュニティ形成における宗教の役割が示されている。

〔付記〕本研究は、JSPS 科研費（24K22679）の助成を受けたものによる。

〔参考文献〕

今井昭夫 1994「第 4 章　社会主義ベトナムにおける宗教と国民統合」アジア経済研究所『社会主義ベトナムとドイモイ』NO,446，153～190 頁

岩佐光広 2011「『難民』から『外国人』へ：日本における第三国定住者をめぐる包摂と排除の諸相」『日本文化人類学会研究大会発表要旨集』

浦崎政祥 2002「大和定住促進センターの活動と閉所について」大和市役所総務部総務課『大和市史研究』NO.28,69～91 頁

遠藤允 1990『難民の家』講談社

カトリック難民定住委員会 1994『海を越えてきた仲間たち：インドシナ難民定住記』

川上郁雄 2001『越境する家族：在日ベトナム系住民の生活世界』明石書店

久保忠行・瀬戸徐映里奈・乾美紀 2014「日本の難民受け入れ経験を問いなおす：兵庫県姫路市の定住センターと難民キャンプの記憶から」『難民研究ジャーナル』第 4 号,1～13 頁

財団法人アジア福祉教育財団難民事業本部 1996『姫路定住促進センター16 年誌―日本で最初のインドシナ難民定住促進の役割を終えて―』

財団法人アジア福祉教育財団難民事業本部 1998『大和定住促進センター18 年誌―インドシナ難民の日本定住支援センターの軌跡―』

高橋泉 2024「地域社会における難民支援と宗教組織の役割―長期的な支援活動とその宗教的背景―」『移民政策研究』第 16 号，113～126 頁

高橋典史 2018「日本におけるインドシナ難民の地域定住と宗教の関わり―ベトナム難民の事例を中心に―」高橋典史・白波瀬達也・星野壮・岡井宏文・荻翔一・徳田剛・永田貴聖・野上恵美・山本崇記（編著）『現代日本の宗教と多文化共生：移民と地域社会の関係性を探る』明石書店,67～88 頁

寺本信生 2001「大和定住促進センターの開設から安定期へ」大和市役所総務部総務課『大和市史研究』NO.27,31～59 頁

戸田佳子 2001『日本のベトナム人コミュニティ：一生の時代、そして今』暁印書館

村田紋菜 2013「在日カンボジア系住民の現在：神奈川県上座部仏教寺院兼文化センター建設計画をめぐって」『紀尾井論叢』第 1 号，1～11 頁